

小シンポジウムA「19世紀前半の西半球世界」報告要旨

【司会】中嶋啓雄（大阪大学）

【報告】

浜 忠雄（北海学園大学）「ハイチ革命と『西半球秩序』」

肥後本芳男（同志社大学）「3つの革命とジェファソンの『自由の帝国』」

八嶋由香利（慶應義塾大学）「J. グエイとその時代 –スペインの植民地再編とキューバ、カタルーニャー」

【コメント】伏見岳志（慶應義塾大学）

本シンポジウムはラテンアメリカおよびカリブ地域、いわゆる中南米に新たな独立国が誕生するなかで、19世紀前半、おぼろげながらも浮かび上がってきた西半球秩序を合衆国のみならず、中南米からの視座を重視して検討することを目的に企画されたものである。

浜氏の第一報告「ハイチ革命と『西半球世界秩序』」は、まず、ハイチ革命の研究史を簡潔に紹介し、ハイチ革命が南北アメリカ諸国の奴隷解放や脱植民地化過程に与えた影響の両義性を指摘した。そして、宗主国フランスによるハイチの独立承認（1825年）の経緯を、ハイチと合衆国やラテンアメリカ諸国との関係に言及しつつ考察した。その結果、ハイチが巨額の賠償金をフランスに支払い独立をいわば買い取ったのは、国内に奴隷制を抱える合衆国の「交易すれども承認せず」という姿勢や、黒人奴隷に対して人種的偏見を持つラテンアメリカ諸国の指導者シモン・ボリーヴァルの非協力的な態度に原因があることを明らかにした。まとめとして、合衆国はともかく、ラテンアメリカとの間である種の共同体（「ラテンアメリカ=カリブ共同体」とでも呼ぶべきもの）をハイチは構想していたが、それは挫折したと結論づけた。

肥後本氏の第二報告「三つの革命とジェファソンの『自由の帝国』」は、西半球世界に関する合衆国の視座を検討した。アメリカ革命に際して、合衆国はまずミシシッピ川以東の西部への統治の拡大を、奴隷制を禁ずる北西部条例に結実させた。まもなくフランス革命が勃発して、合衆国では一時的に大西洋革命への期待が膨らんだけれども、19世紀初頭にそれは放棄され、北米大陸における共和主義の拡大の動きとして再構築された（「アメリカ例外主義」）。ハイチ革命に直面した合衆国では当初、現実主義的観点から同国との貿易が重視されたが、人種主義的な南部プランターに支持されたジェファソン政権が誕生するとハイチとの関係は疎遠になり、同時にルイジアナ購入により領土が倍増するなかで、白人共和国は膨張していく結果となった。ラテンアメリカ諸国の独立をいち早く承認した合衆国ではあるが、その後、積極的な援助を与えることはなく、ヨーロッパとは異なる西半球秩序へのジェファソンの期待にもかかわらず、アメリカ人の関心の対象は西部に移っていった。

八嶋氏の第三報告「帝国の再編をめざして」は、19世紀後半以降のスペイン帝国の再編を視野に入れつつ、本国スペインとの関係を軸に19世紀前半の西半球秩序におけるキューバ（海外県）の位置を究明した。1830年代後半、スペインは自由主義的な立憲君主制に移行したが、キューバは憲法の適用範囲から除外されて、「ハイチ化」を恐れるクリオーリョの寡頭支配の下、奴隷制が存続した。その結果、キューバはハイチに代わって、合衆国との貿易において重要な地位を占めたが、合衆国の領土拡張主義に対する警戒感も高まった。しかし、19世紀後半に入ると南北戦争を経て、合衆国で奴隷制が廃止されて、キューバでも奴隷制度の維持は困難になり、スペイン本国から多数の移民が流入するようになった。また、スペイン帝国の衰退が加速するなかで、本国-キューバ関係も再編されて、西半球秩序の変容に繋がっていった。

コメンテーターの伏見氏は、ヨーロッパを中心とする帝國的秩序としての環大西洋世界が強固であった18世紀半ばまでと、帝國的秩序の改変に伴い西半球世界が次第に浮上する18世紀後半以降を対比しつつも、19世紀前半における西半球秩序の限界を安全保障・経済面の結集力の弱さ、政治社会体制の多様性、ヨーロッパ勢力のプレゼンスなどの観点から指摘した。

フロアからは浜氏に対して、石川敬史氏からサン・ドマング（独立前のハイチ）から見た合衆国について、また、全般的な問題として、19世紀前半における通信・交通手段についても質問が出され、浜氏が応答した。さらに安武秀岳氏の質疑に応えるかたちで、各報告者から西半球世界についてより詳細な説明がなされた。各国の「西半球世界観」と実際の「西半球秩序」との相違については、古矢旬氏から指摘があった。

19世紀前半の西半球世界の輪郭は明瞭ではなく、時間的制約もあって、それについて必ずしも明確な図式は得られなかったが、全体として、この時代の合衆国史と中南米史の共同研究の可能性を感じさせるシンポジウムであった。

（中嶋啓雄）